

北山友松子 医案③

己酉の冬、愚、亜相公の嚴命を奉りて江府に趨く。時に公子松平京兆公違和す。臘月下浣に至り、公、愚に公子の貴侯を診することを命ず。

其の症、日晡潮熱、頭額疼痛、鼻乾齧腫、痰嗽己えず、声音重濁、其の脈浮数にて長。乃ち、府医安田宗軒に問うて曰く、「貴 恙何時より起り、薬品進むること何剂を以てす」と。宗軒云く「是より前、八月初旬に、外風邪に感じ、頭額疼痛、鼻塞声濁す。因て藿香正気散を進め、数貼にして反つて発熱を加う。次に人參敗毒散を進む。而して外邪退くと雖も其の熱未だ尽きず、改むるに升陽散火湯を以てす。而れども熱亦未だ己えず。反つて痰を加え、血絲を加う。故を以て更えるに滋陰降火湯を以てす。而して痰血止むと雖も又体倦を見わす。易えるに補中益気湯を以てす。則ち動止み、健に似たり。而るに、又頭痛、齧腫、数症起伏し、今に至るも己えざること將に五閱月ならんとするのみ。未だ審らかならず。日後の変症また如何。某(それがし)慮る所は此れなり」と。愚、笑を含みて起つ。既にして命を復す。公の曰く、「診する所の侯は何如」。愚、白(もう)して云く、「原公子の気候、数月を経ると雖ども、幸いにして年盛んに気健やかなり。外邪伝変を致すことなし、只、陽明の一經に滞るのみ」と。

公曰く、「然らば、或いは対症の薬を服すれば、近日に瘳ゆるを得さしめ、能く歳旦の慶祝の会に陪（したが）わんや」。愚、唯然たり。遂に愚に命じて薬を進む。

愚、宗軒が薬筐を用い、更に宗軒をして釐等を把して其の薬を秤せしむ。此れ、蓋し宗軒が軽症を重治して数月を遷延せるは、丞相公より罪を得ることを恐るるが故に縁りて然らしむるのみ。臣の剂する所は乃ち升麻葛根湯なり。

宗軒、諤然として問うて云く、「此の薬も亦、能く吾が主の数症を治せんや」と。

愚云く、「口説憑（たの）むなし。事了（おわ）らば便ち見るに、且（まさ）に五貼より多く須（もち）いずして即ち効あらん」と。宗軒自ら痴を服さず、尚お呢喃の声有り。愚も亦明らかに其の前哲の症に因て薬を用いるの理を告げず。彼をして自ら医学を勤めしむ。乃ち是れ一の陰騭（のぼ）らん。既にして其の薬を進めて五貼に至り、果然、微汗して解し、諸症失するが如し。宗軒措（お）く罔（な）し。

愚云く、「今や前症解すと雖も、然れども恐らくは表虚して再び感ずるに、宜しく子が前日進めし所の補中益気湯を剂し、芍薬、葛根を加え、以て後患を杜（ふさ）がば可なり」と。宗軒云く「諾」。